

令和 8 年度病害虫発生予報第 4 号

長崎県病害虫防除所長

向こう 1 か月間における主な病害虫の発生動向は次のように予想されます。

【予報の概要】

農作物名	病 害 虫 名	発 生 程 度	
		現 況	予 想
早期水稻	いもち病（穂いもち）	やや少	やや少
	紋枯病	やや少	並
	穂吸汁性カメムシ類	やや多	やや多
普通期水稻	いもち病（葉いもち）	並	並
	紋枯病	並	やや多
	縞葉枯病	並	並
	セジロウンカ	やや少	並
	トビイロウンカ	やや少	並
	コブノメイガ	やや多	やや多
大豆	ハスモンヨトウ	やや少	並
いちご （育苗床）	うどんこ病	やや少	やや少
	炭疽病	やや多	やや多
	ハダニ類	少	やや少
アスパラガス	斑点性病害（褐斑病、斑点病）	やや少	やや少
	アザミウマ類	やや少	やや少
かんきつ	かいよう病	やや少	やや少
	黒点病	やや多	やや多
	ミカンハダニ	やや少	並
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並
びわ	がんしゅ病	少	やや少
	灰斑病	並	並
	ナシヒメシンクイ	やや多	やや多
果樹共通	カメムシ類（防除情報第 6 号）	やや多	やや多
茶	炭疽病	やや多	やや多
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並
	チャノコカクモンハマキ	並	並
	チャノホソガ	やや少	並
	カンザワハダニ	やや少	やや少
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	やや多
	クワシロカイガラムシ	少	少

【発生予報】 本文の（ ）内は平年値

早期水稻

1. いもち病（穂いもち）

（1）予報内容：発生程度 やや少

（2）予報の根拠

ア 7 月前期の巡回調査（24 筆）の結果、葉いもちの発生を認めなかった（発病株率 2.2%、発生圃場率 25.3%）。

イ 7 月前期の巡回調査（出穂後圃場 20 筆）の結果、穂いもちの発生を認めなか

った（発生を認めない）。

ウ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、穂いもちの発生を認めなかった（発病穂率1.1%）。

（3）防除上注意すべき事項

葉いもちの発生が認められる圃場で今後穂揃期を迎える圃場は、穂揃期に防除を行う。また、枝梗いもちを対象とする場合は、さらに7～10日後散布する。

2. 紋枯病

（1）予報内容：発生程度 並

（2）予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（24筆）の結果、発生を認めなかった（発病株率0.3%、発生圃場率10.5%）。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発病株率は32.0%（49.1%）であった。

ウ 向こう1か月の気温は高い見込みであり、本病の発生に好適である。

（3）防除上注意すべき事項

粉剤及び液剤は株元に十分薬剤が付着するよう丁寧に散布する。

3. 穂吸汁性カメムシ類

（1）予報内容：発生程度 やや多

（2）予報の根拠

ア 7月前期のイネ科雑草におけるすくい取り調査（22地点）の結果、捕虫網による10回すくい取りあたり虫数は6.2頭（5.8頭）であった（表）。このうち、斑点米産出能力が比較的高いクモヘリカメムシは3.5頭（0.1頭）と平年より多かった。

イ 7月前期の巡回調査における水田内すくい取り調査（出穂後圃場20筆）の結果、捕虫網による20回すくい取りあたり虫数は2.5頭（0.6頭）、発生圃場率は50.0%（25.0%）であり、一部イネカメムシの多発圃場が見られた。

ウ 向こう1か月の気温は高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

表 穂吸汁性カメムシ類雑草地すくい取り調査における発生状況（令和8年7月前期調査）

種類別	10回すくいとり当り虫数(頭)						発生地点率(%)	
	R3	R4	R5	R6	R7	平年	R8	平年
ホソハカメムシ	0.3	0.8	0.3	0.8	2.2	0.7	0.6	57.5
クモヘリカメムシ	0.0	0.2	0.1	0.0	0.3	0.1	3.5	18.2
シラホシカメムシ	0.0	0.0	0.1	0.1	0.2	0.1	0.3	25.8
アカシジカスミカメ	2.8	7.0	2.5	2.2	4.3	4.8	1.8	73.6
ミナミアカメムシ	0.0	0.0	0	0	0.0	0.0	0.0	6.6
イネカメムシ	-	-	-	0	0.3	-	0.0	-
計(イネカメを除く)	3.2	8.1	2.9	3.2	7.0	5.8	6.2	-

注) - はデータなし。イネカメムシの調査はR6年から開始のため、過去や平年の数値はない。

注) 平年との比較のため、イネカメムシは合計値から除く。

（3）防除上注意すべき事項

ア 出穂期以降の水田周辺の雑草地を除草すると本田へのカメムシ類の飛来を助長するので行わない。

イ 本田への飛来が多くなる夕方に薬剤散布すると効果が高い。

ウ イネカメムシは出穂直後から本田へ飛来して吸汁加害するため、防除適期は出穂直後とその7～10日後であり、他の斑点米カメムシ類の防除適期と異なるので注意する。

エ 薬剤散布にあたっては、使用時期（収穫前日数）等の農薬の使用基準を遵守するとともに周辺環境（ミツバチや水産動植物等）に配慮し、薬剤の飛散に十分注意する。

普通期水稻

1. いもち病（葉いもち）

（１）予報内容：発生程度 並

（２）予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（68筆）の結果、葉いもちの発病株率は0.4%（0.2%）、発生圃場率は5.9%（3.9%）であり、一部多発圃場が見られた。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（過去10か年平均 発病株率0.4%）。

ウ 葉いもちの感染に好適な条件を満たした日は下表のとおりである（葉いもち感染好適条件判定モデルによる。詳細はホームページを参照）。

月日	鰐浦	厳原	芦辺	平戸	松浦	佐世保	西海	有川	長崎	島原	福江	口之津	脇岬
7/1	-	-	-	-	-	-	●	-	-	●	-	●	-
7/2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/4	-	-	-	-	-	●	●	-	●	●	-	●	●
7/5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-
7/6	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	●
7/7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/9	-	-	-	-	-	?	-	-	-	-	-	-	-
7/10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

発生指標	?:判定 不能	一:好適 条件なし	1:準好 適条件1	2:準好 適条件2	3:準好 適条件3	4:準好 適条件4	●:好適 条件
------	------------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------------	------------

*感染した場合、感染好適と判断された日から7～10日後に病斑発現

（３）防除上注意すべき事項

ア 余り苗、補植用苗は発病の伝染源となるので早めに処分する。

イ 葉いもちの急性型病斑が見られた場合は早急に防除を行う。

ウ 葉いもちの発生が認められる圃場では、穂ばらみ期と穂揃期の2回防除を行う。

2. 紋枯病

（１）予報内容：発生程度 やや多

（２）予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（68筆）の結果、発生を認めなかった（過去10か年平均 発病株率0.0%、発生圃場率0.2%）。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発病株率は0.5%（過去10か年平均 0.1%）であった。

ウ 向こう1か月の気温は高い見込みであり、本病の発生に好適である。

（３）防除上注意すべき事項

粉剤及び液剤は株元に十分薬剤が付着するよう丁寧に散布する。

3. 縞葉枯病

（１）予報内容：発生程度 並

（２）予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（68筆）の結果、発生を認めなかった（発生を認めない）。

- イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（発生を認めない）。
- ウ 7月前期の巡回調査（68筆）の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.0頭（0.0頭）、発生圃場率は16.2%（16.1%）であった。
- エ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.2頭（0.0頭）、寄生株率は11.0%（4.4%）であった。

4. セジロウンカ

（1）予報内容：発生程度 並

（2）予報の根拠

- ア 7月前期の巡回調査（68筆）の結果、株当たり虫数は0.0頭（0.1頭）、発生圃場率は14.7%（33.1%）であった。
- イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、株当たり虫数は0.8頭（1.8頭）、寄生株率は22.0%（47.8%）であった。
- ウ 向こう1か月の気温は高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

5. トビイロウンカ

（1）予報内容：発生程度 並

（2）予報の根拠

- ア 7月前期の巡回調査（68筆）の結果、発生を認めなかった（株当たり虫数0.0頭、発生圃場率3.4%）。
- イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、株当たり虫数は0.01頭（0.03頭）、寄生株率は1.0%（3.0%）であった。
- ウ 6月7日に黄色粘着板及びスマート害虫モニタリングシステム（諫早市）で初誘殺を確認した。その後、6月20日頃にまとまった飛来があり、その後も7月1日から9日までに複数回の飛来があったと推測される（表）。
- エ 向こう1か月の気温は高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

表 トビイロウンカの誘殺状況(令和8年)

月・日	トビイロウンカ								(参考)セジロウンカ							
	諫早				佐世保	北有馬	岐宿		諫早				佐世保	北有馬	岐宿	
	白熱	ネット	スマート (参考)	黄粘 (参考)	白熱	白熱	白熱		白熱	ネット	スマート (参考)	黄粘 (参考)	白熱	白熱	白熱	
6/6	0	0	0	0	0	0	0		1	0	13	19	0	0	0	0
6/7	0	0	1	4	0	0	0		0	0	1	23	0	0	0	1
6/8	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	11	0	0	0	0
6/9	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	8	0	0	0	0
6/10	0	0	0	0	0	0	0		0	0	2	5	0	0	0	0
6/11	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	8	0	1	0	0
6/12	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	6	0	0	0	0
6/13	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	9	0	0	0	0
6/14	0	0	0	0	0	0	0		0	0	1	6	0	0	0	0
6/15	0	0	0	0	※1	0	0		0	0	0	7	※1	0	0	0
6/16	0	0	0	0	※2	0	0		0	0	0	9	※2	0	0	0
6/17	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	5	0	0	0	1
6/18	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	9	0	0	0	0
6/19	0	0	0	0	0	0	2		1	1	3	0	0	0	0	1
6/20	0	0	8	2	21	0	0		0	18	5	31	0	0	0	5
6/21	0	0	7	5	2	0	0		1	8	6	9	0	0	0	0
6/22	0	0	0	2	4	0	0		0	2	3	3	0	0	2	2
6/23	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	12
6/24	0	0	0	0	0	0	0		0	0	2	0	0	0	0	96
6/25	0	0	-	4	0	0	0		4	0	-	40	0	1	126	0
6/26	0	0	-	0	0	0	0		0	0	-	17	0	0	0	5
6/27	0	0	0	0	0	0	0		4	0	2	6	0	0	0	5
6/28	0	0	0	2	0	0	0		0	1	0	5	0	0	0	14
6/29	0	0	0	0	-	0	1		0	0	0	2	-	1	21	0
6/30	0	0	0	0	-	0	0		0	0	0	2	-	0	116	0
7/1	0	0	3	2	-	0	7		1	2	12	4	-	0	0	19
7/2	0	0	4	1	-	1	7		5	0	12	6	-	1	34	0
7/3	0	0	0	0	-	1	2		0	0	0	8	-	2	7	0
7/4	0	0	9	2	-	0	3		2	0	47	10	-	0	37	0
7/5	0	0	6	2	-	0	1		0	0	67	9	-	0	6	0
7/6	0	0	3	2	-	1	1		0	0	3	10	-	3	0	0
7/7	0	0	2	2	0	0	0		0	1	0	7	1	0	1	0
7/8	0	0	0	5	0	0	0		0	0	0	8	0	0	0	0
7/9	0	0	1	2	0	0	0		0	0	1	5	0	0	0	0
7/10	0	0	0	3	0	0	0		0	0	1	3	0	0	0	1
7/11		0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0
7/12		0	0	0	0	0	0		0	0	0	2	0	0	0	1
7/13		0	0	0	0	0	0		0	0	0	1	0	0	0	0

※白熱: 60W白熱灯予察灯

※ネット: ネットラップ

※スマート: スマート害虫モニタリングシステム(白色・青色・緑色LED+UV)

※黄粘: 黄色粘着板(上端が水面から約40cmの設置高→その後は水稻の生育に合わせて草冠高より20cm程度低くなるよう調節、畦畔から約3m入った圃場内に設置面での誘殺数、早期水稲4/30→普通期水稲7/11設置)。

※表中赤線は気象庁発表の九州北部梅雨明け(7/8頃)。

※データ欄の-は欠測、未調査。

※1停電のため6/20欄に虫数を合算。

※2停電のため6/21欄に虫数を合算。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今後の圃場での発生状況に注意し、7月下旬～8月上旬にかけて100株当たり20頭以上の成虫の寄生が認められる場合は、幼虫ふ化揃い期に防除を行う。

イ 株元に多く寄生するので薬剤散布にあたっては株元に薬剤が十分付着するように丁寧に散布する。

ウ 圃場間や同一圃場内でも偏って発生していることが多いので、できるだけ圃場の見回りを徹底する。また、飛来波の今後の発生予測は図のとおりであるが、地域や圃場により発生状況が異なることがあるので、それぞれの圃場における発生状況を把握した上で防除を行う。

6. コブノメイガ

(1) 予報内容: 発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5日にフェロモントラップ(諫早市)で初誘殺が確認された。その後、6月20日頃にまとまった飛来があったと推測される(表)。

イ 7月前期の巡回調査(68筆)の結果、食害株率は1.7%(0.5%)、発生圃場率は20.6%(14.4%)であった。

ウ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、食害株率は6.0%(4.1%)であった。

エ 向こう1か月の気温は高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

表 コブノメイガの誘殺状況(令和8年)

月・日	コブノメイガ		
	諫早	波佐見	対馬
フェロモントラップ			
6/1	0		
6/2	0		
6/3	0		
6/4	0		
6/5	1		
6/6	0		
6/7	0		
6/8	0		
6/9	0		
6/10	1		
6/11	0		
6/12	1		
6/13	0	0	
6/14	1		
6/15	1		
6/16	0		
6/17	0		
6/18	0	0	
6/19	6		
6/20	44		2
6/21	8		
6/22	12		
6/23	6	0	
6/24	11		
6/25	1		
6/26	0		
6/27	1		1
6/28	0	0	
6/29	0		
6/30	0		

月・日	コブノメイガ		
	諫早	波佐見	対馬
フェロモントラップ			
7/1	0		
7/2	0		
7/3	0	0	
7/4	0		1
7/5	0		
7/6	0	0	
7/7	0		
7/8	0		
7/9	0		
7/10	0		
7/11	0		
7/12	0		
7/13	0		

※フェロモントラップ: 諫早 早期水稻5/13→普通期水稻 7/11、波佐見6/9、対馬6/17設置。

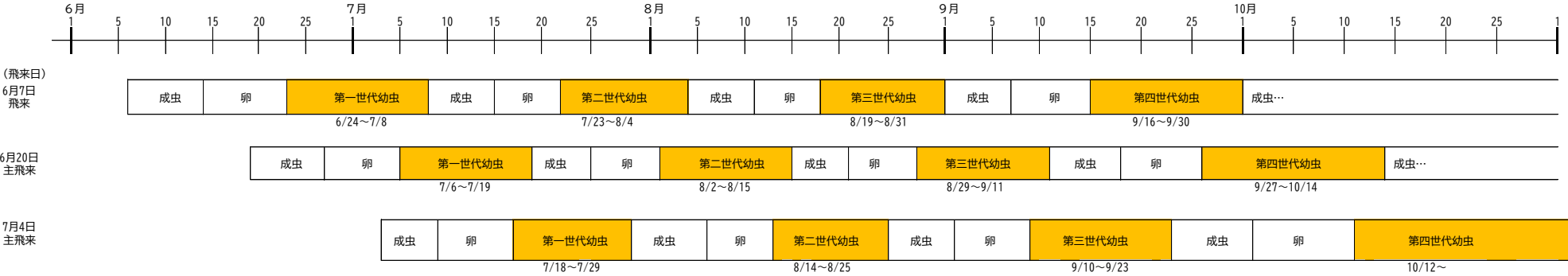
※データ欄の空欄は未調査、－は欠測

※表中赤線は気象庁発表の九州北部梅雨明け(7/8頃)。

(3) 防除上注意すべき事項

圃場間や同一圃場内でも偏って発生していることが多いので、圃場の見回りを徹底する。薬剤散布は、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7～10日後、粒剤では成虫発生最盛期に行う。

(図) トビイロウンカの発生予測図 (令和8年7月13日時点)



(図) コブノメイガの発生予測図 (令和8年7月13日時点)



※ 発生予測の気温は長崎市のアメデスデータを用いた (6/1～7/12 実測値 7/13以降は2015～2024年の平均値)

大豆

1. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップ（諫早市）の誘殺量はやや少で推移している（図）。

イ 向こう1か月の気温は高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 圃場の見回りを徹底し、白変葉が散見され始めたら早急に防除を行う。

イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫期に薬剤散布する。

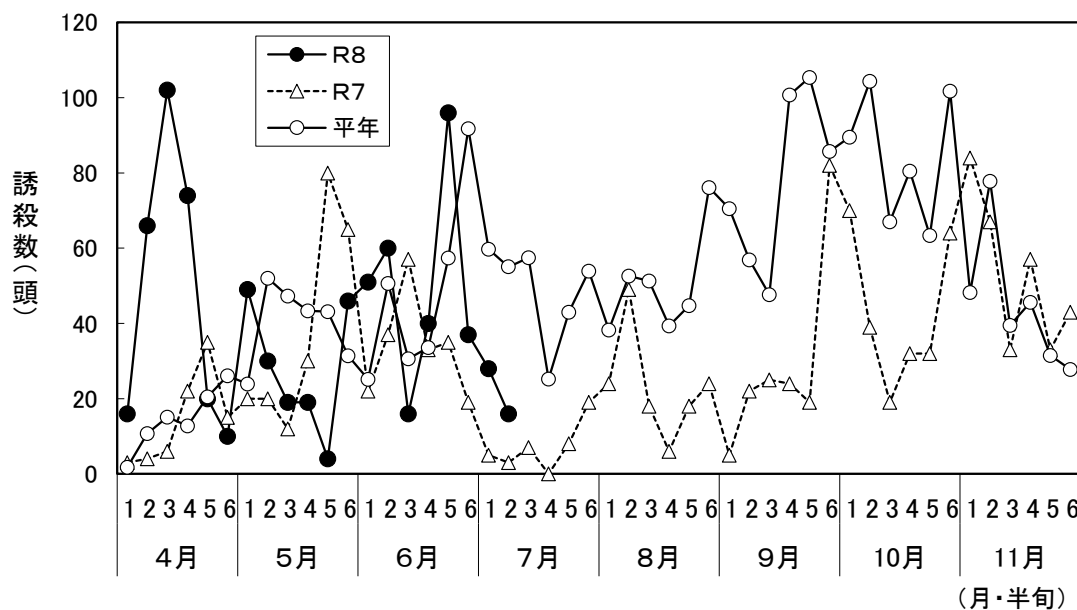


図 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況（諫早市小船越町）

いちご（育苗床）

1. うどんこ病

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（29筆）の結果、発生を認めなかった（発病株率0.0%、発生圃場率1.2%）。

(3) 防除上注意すべき事項

本病菌の本圃への持ち込みを防ぐため、定期的な防除を行う。特に「恋みのり」は「ゆめのか」に比べて葉で本病が発生しやすいため留意する。

2. 炭疽病

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（29筆）の結果、発病株率は0.0%（0.0%）、発生圃場率は10.3%（4.1%）であった。

イ 向こう1か月の気温は高い見込みであり、本病の発生に好適である。

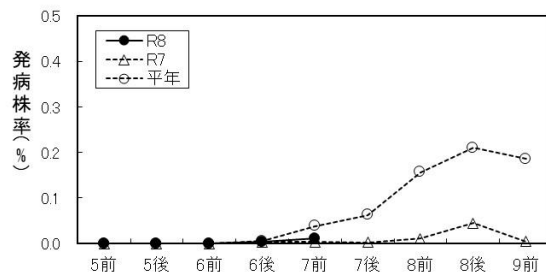


図 炭疽病 発病株率の推移

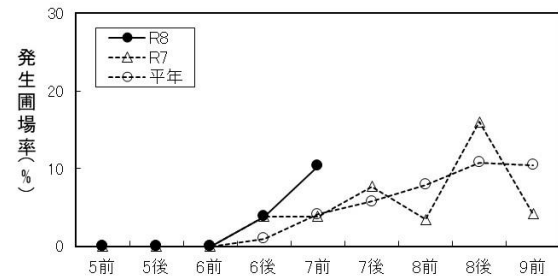


図 炭疽病 発生圃場率の推移

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 育苗床が多湿にならないように、長時間のかん水はしない。ポット間隔を十分にとり、排水対策を確実に行う。また、除草を徹底するなど、環境整備に努める。
- イ 育苗床は全面マルチを行い、降雨等による地面からの病原菌の跳ね上がりを防止する。また、雨よけ施設がある育苗床では雨よけを行う。
- ウ 発病した子苗およびその周辺の苗は速やかに処分する。除去した発病株や茎葉は、圃場内やその周辺に放置しない。
- エ 葉の展開間隔にあわせて定期的に薬剤防除する。特に強風雨、台風などの前後や下葉除去など株に傷が付くような作業後は重点的に行う。
- オ 降雨が予想される場合の薬剤防除は、固着性の展着剤を加用すると効果が安定する。

3. ハダニ類

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

- ア 7月前期の巡回調査(29筆)の結果、寄生株率は0.4%(4.5%)、発生圃場率は10.3%(31.0%)であった。
- イ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みであり、本虫の発生に好適である。

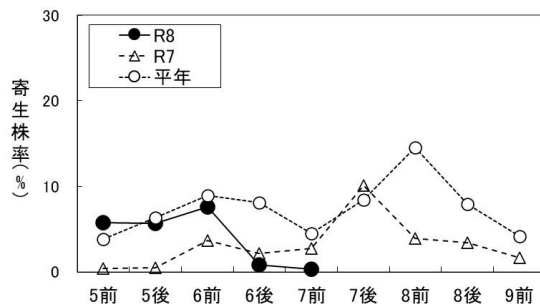


図 ハダニ類 寄生株率の推移(育苗圃)

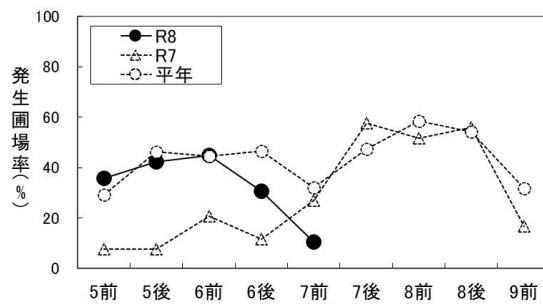


図 ハダニ類 発生圃場率の推移(育苗圃)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 苗による本圃への持ち込みを防ぐため、定植前までの防除を徹底する。
- イ 土着天敵の活動が活発になる時期であり、天敵への影響が大きい薬剤の使用は避け、気門封鎖剤等の天敵に影響の少ない薬剤を積極的に使用する。なお、気門封鎖剤は卵に対する効果が低いので5～7日おきに連続散布を行う。
- ウ 下葉の葉裏に多く寄生するので、薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布する。
- エ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統の薬剤(令和8年長崎県病害虫防除基準P186～187の「作用機構による分類(IRAC)」参照)の連用を避け、薬剤感受性低下の恐れが少ない気門封鎖剤や異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。

アスパラガス

1. 斑点性病害

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（11筆）の結果、発生を認めなかった（発病側枝率0.5%、発生圃場率25.1%）。

2. アザミウマ類

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（11筆）の結果、払い落とし虫数（10.5cm×22.5cm白色板に5回×10か所）は6.4頭（14.8頭）、発生圃場率は45.5%（54.7%）であった。

かんきつ

1. かいよう病

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（34筆）の結果、発病葉率は0.2%（0.4%）、発生圃場率は11.8%（24.0%）、発病果率は0.0%（0.2%）、果実での発生圃場率は11.8%（10.1%）であった。

2. 黒点病

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（34筆）の結果、発病果率は6.1%（0.7%）、発生圃場率は44.1%（6.3%）であり、一部多発圃場が見られた。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤の残効の目安を参考にしながら、防除を行う。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（34筆）の結果、寄生葉率は3.9%（7.6%）、発生圃場率は25.0%（30.9%）であった。

イ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和8年長崎県病害虫防除基準P324～326およびP330～332の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

4. チャノキイロアザミウマ

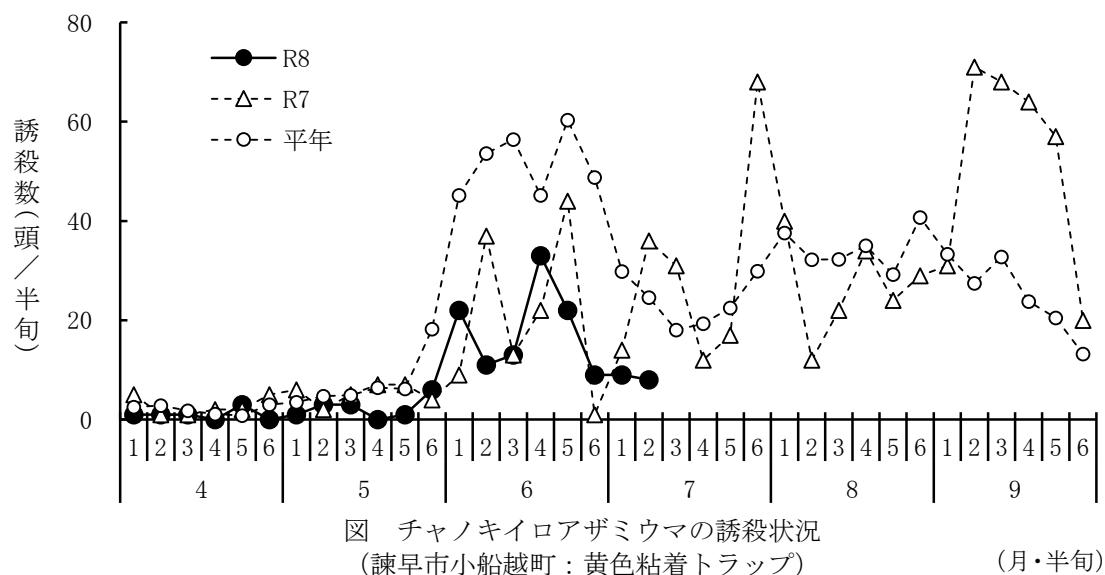
(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（34筆）の結果、果梗部の被害果率は0.0%（0.1%）、発生圃場率は2.9%（5.6%）、果頂部の被害果は発生を認めなかった（被害果率0.2%、発生圃場率3.1%）。

イ 黄色粘着トラップ（諫早市）による誘殺量は、やや少なく推移している（図）。

ウ 向こう1か月の気温は高い見込みであり、本虫の発生に好適である。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した発生ピーク予測日を下表に示した。

表 有効積算温度計算シミュレーションによるチャノキイロアザミウマ成虫の発生ピーク予測日（令和8年7月14日時点）

地点名/標高 (位置の目安)		第5世代	第6世代
長崎/26.9m (气象台)	今年	7/26	8/11
	前年	7/29	8/14
佐世保/3.9m (佐世保港付近)	今年	7/27	8/12
	前年	7/31	8/16
島原/14m (島原外港IC付近)	今年	7/25	8/10
	前年	7/28	8/15
大村/3m (長崎空港)	今年	7/27	8/12
	前年	7/31	8/16
平戸/57.8m (岩の上町)	今年	8/8	8/26
	前年	8/11	8/28
口之津/13m (口之津港付近)	今年	7/28	8/13
	前年	8/2	8/19

注1:発生ピーク予測日は気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した。なお、積算には令和8年7月13日までは観測値を、以降は平年値を使用した。

注2:同一地区内でも、山間部では発生ピーク予測日が異なる場合があるので注意する。

また、今後の気象条件により予測日は前後する場合がある。

注3:表中の発生ピーク予測日の5日前から発生ピーク予測日の期間に薬剤散布をすると防除効果が高い。なお発生が多い園では、1果当たり寄生虫数が0.1頭に達する前に防除を行う。

イ 茶、かき、ぶどう及びイヌマキなどから移動して加害することがあるので、それらでの発生にも注意する。

1. がんしゅ病

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（10筆）の結果、発生を認めなかった（発生枝葉率0.1%、発生圃場率11.4%）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は樹体の傷口から感染するため、芽かきや剪定作業時はできるだけ断面（傷）が小さくなるようハサミを用い、作業後は速やかにペースト剤の塗布を行うなど、断面の癒合を促進する。

イ 感染予防のため、整枝・剪定後や強風を伴う雨が予想される場合には、カスガマイシン・銅水和剤などを散布する。

ウ ナシヒメシンクイの侵入口は感染経路となり、また病斑部にナシヒメシンクイが食入すると感染が助長されるため、本虫に対する防除も併せて行う。

2. 灰斑病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（10筆）の結果、発生枝葉率は8.4%（13.0%）、発生圃場率は90.0%（87.1%）であった。

3. ナシヒメシンクイ

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（10筆）の結果、発生を認めなかった（寄生枝葉率0.0%、発生圃場率2.9%）。

イ フェロモントラップ（諫早市）の誘殺量は、平年より多く推移している（図）。

ウ 向こう1か月の気温は高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 芽かき後の傷口や剪定痕から食入しやすいので、作業後は速やかに薬剤散布やペースト剤の塗布を行う。

イ 本虫の侵入口はがんしゅ病の感染経路となり、また、がんしゅ病の病斑部に本虫が食入すると感染が助長されるため、がんしゅ病に対する防除も併せて行う。

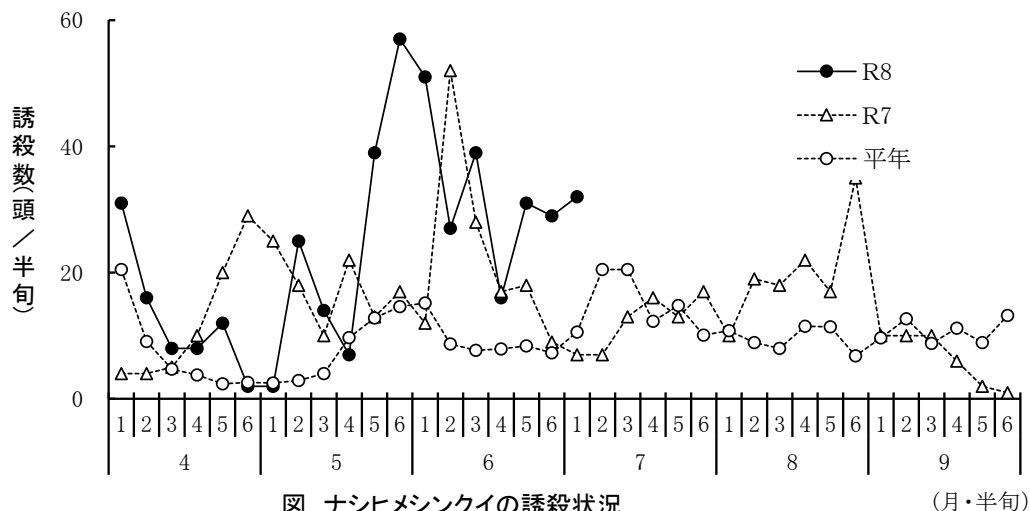


図 ナシヒメシンクイの誘殺状況
(諫早市小船越町:フェロモントラップ)

果樹共通

1. カメムシ類

令和8年7月15日付け**病虫害発生予察防除情報第6号**を参照。

茶

1. 炭疽病

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
- (2) 予報の根拠
 - 7月前期の巡回調査（12筆）の結果、1㎡当たり発病葉数は12.6枚（5.0枚）、発生圃場率は83.3%（57.6%）であった。
- (3) 防除上注意すべき事項
 - ア 三番茶の萌芽～開葉初期に重点的に防除を行う。
 - イ 多発状態の続く茶園ではせん枝により伝染源を除去する。
 - ウ 品種により本病への抵抗性に差があるため、「やぶきた」、「おくみどり」など本病に弱い品種は特に注意する。
 - エ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和8年長崎県病虫害防除基準P354の「作用機構による分類（FRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

2. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠
 - ア 7月前期の巡回調査（12筆）の結果、たたき落とし虫数（A4版トレイ）は9.9頭（12.2頭）、発生圃場率は66.7%（90.1%）であった。
 - イ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みであり、本虫の発生に好適である。

3. チャノコカクモンハマキ

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠
 - ア 7月前期の巡回調査（12筆）の結果、1㎡あたり巻葉数は0.8枚（0.4枚）、発生圃場率は33.3%（22.5%）であった。
 - イ フェロモントラップ（東彼杵町）による誘殺数は平年よりも少なく推移している（図）。
 - ウ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みであり、本虫の発生に好適である。

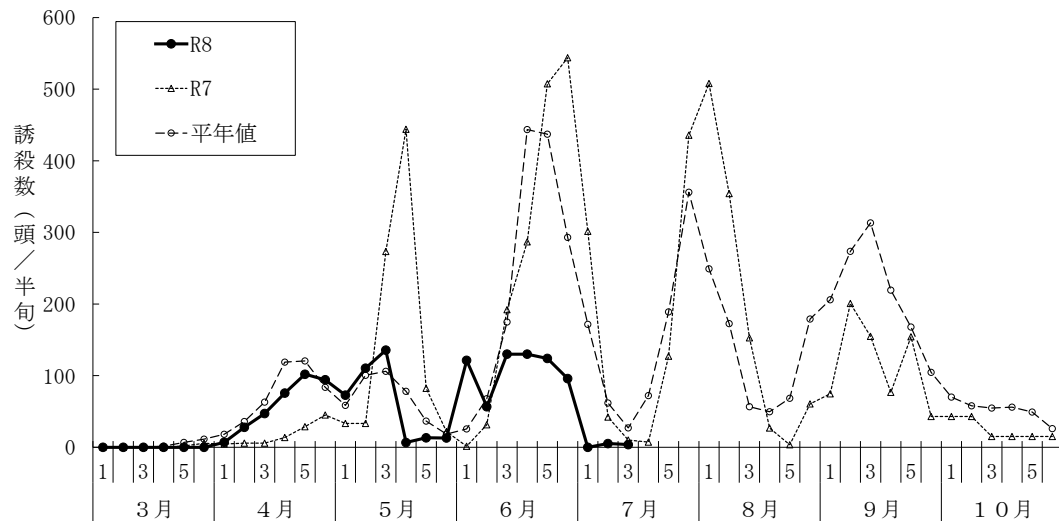


図 チャノコカクモンハマキの誘殺状況（東彼杵町：フェロモントラップ）
※茶業研究室調べ

（３）防除上注意すべき事項

- ア 防除適期の目安は、脱皮阻害剤（ＩＧＲ剤）は発蛾最盛期の頃、その他の薬剤は発蛾最盛期の約７～１０日後である。
- イ 三番茶を摘採中あるいは近日中に摘採予定の圃場では、摘採終了後に防除を実施する。
- ウ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和８年長崎県病虫害防除基準 Ｐ３５５～３５６の「作用機構による分類（ＩＲＡＣ）」参照）の薬剤は連用しない。

４．チャノホソガ

（１）予報内容：発生程度 並

（２）予報の根拠

- ア ７月前期の巡回調査（１２筆）の結果、巻葉被害を認めなかった（１㎡あたり巻葉数０．２枚、発生圃場率１１．２％）。
- イ フェロモントラップ（東彼杵町）による誘殺数は、平年並で推移している（図）。
- ウ 向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みであり、本虫の発生に好適である。

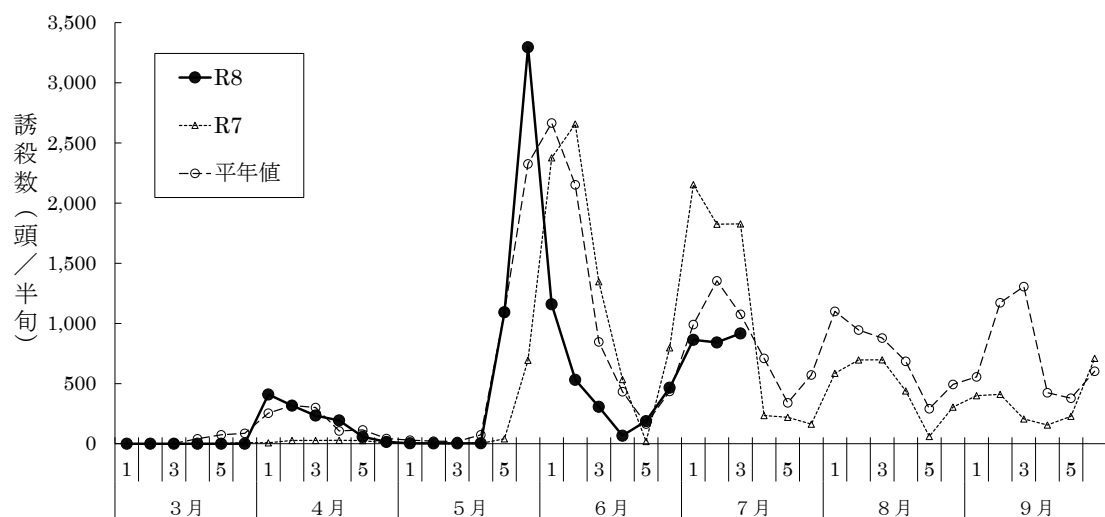


図 チャノホソガの誘殺状況（東彼杵町：フェロモントラップ）
※茶業研究室調べ

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除適期の目安は、脱皮阻害剤（IGR剤）は発蛾最盛期の頃、その他の薬剤は発蛾最盛期の約7～10日後である。
- イ 三番茶を摘採中あるいは近日中に摘採予定の圃場では、摘採終了後に防除を実施する。
- ウ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和8年長崎県病虫害防除基準 P355～356の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

5. カンザワハダニ

- (1) 予報内容：発生程度 やや少
- (2) 予報の根拠
7月前期の巡回調査（12筆）の結果、発生を認めなかった（寄生葉率0.5%、発生圃場率9.6%）。

6. チャノミドリヒメヨコバイ

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
- (2) 予報の根拠
ア 7月前期の巡回調査（12筆）の結果、たたき落とし虫数（A4版トレイ）は5.9頭（3.5頭）、発生圃場率は100%（74.4%）であった。
イ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みであり、本虫の発生に好適である。
- (3) 防除上注意すべき事項
薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和8年長崎県病虫害防除基準 P355～356の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

7. クワシロカイガラムシ

- (1) 予報内容：発生程度 少
- (2) 予報の根拠
7月前期の巡回調査（12筆）の結果、発生を認めなかった（寄生株率4.1%、発生圃場率29.2%）。

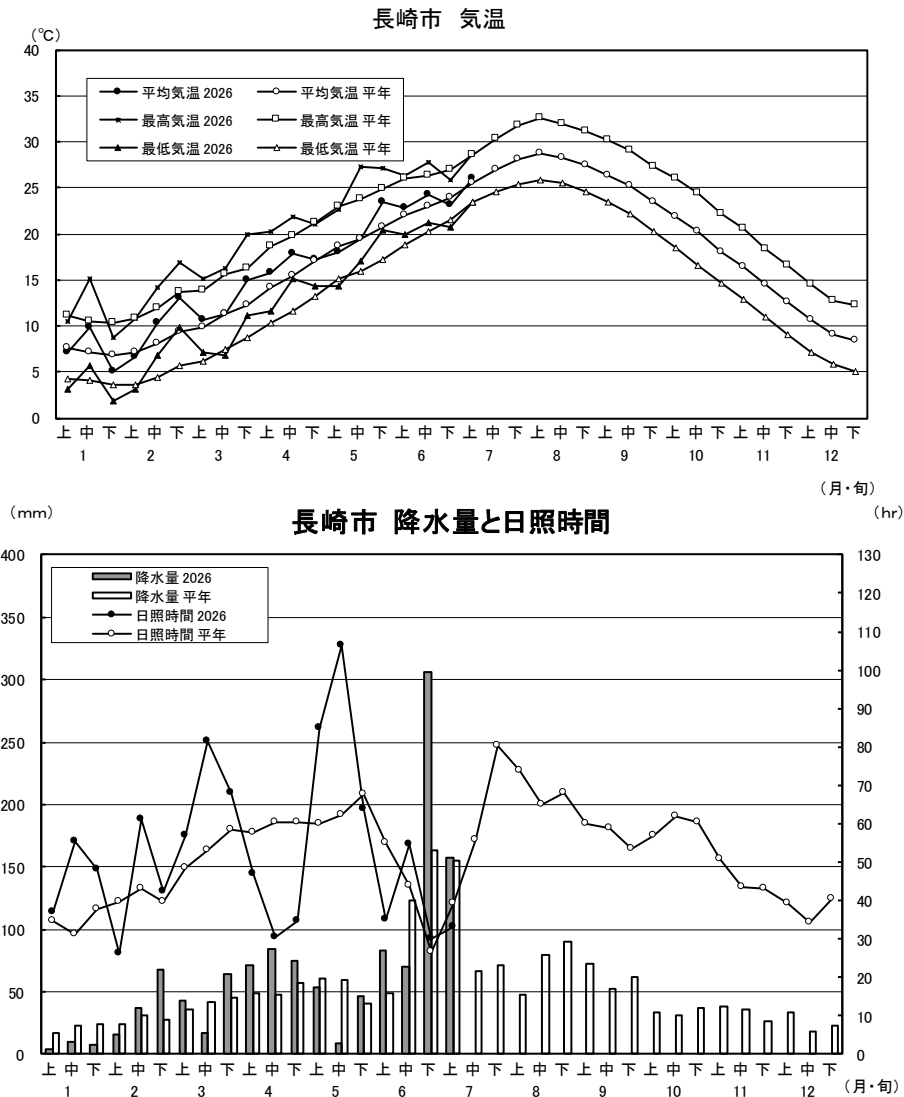
【参考】

(令和8年7月9日発表 1か月予報 福岡管区気象台)

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	10	30	60
降水量	40	40	20
日照時間	20	40	40

※予報対象地域：九州北部地域

令和8年の気象経過(長崎地方気象台)



- 6月から8月までの3か月間を「農薬危害防止運動月間」と定め、農薬事故を防止する運動を実施しています。
- 長崎県病害虫防除所の発行する情報の入手は、インターネットをご利用ください。
「長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室
(長崎県病害虫防除所) ホームページ」アドレス

: <https://www.pref.nagasaki.jp/e-nourin/nougi/JPP/index.html>

- この情報に関するお問い合わせ
長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室
(長崎県病害虫防除所) TEL: 0957-26-0027

